



六
花
12

俳句雑誌りつか
2018（平成30年）
cover design ichigo

祝千代子句集「野に遊ぶ」

野余遊布千代余八千代爾弥栄尔
 のにあそぶちよにやちよにいやさかに
 蓑虫の寝落ちし揺れにかはりけり
 日本海冬日の一つありしのみ
 冬なぎや沖つ浪寄す磯もなく
 佐渡の沖五十海里や冬の凧
 白老やオリオンの闇ふんだんに
 足凍てて北光星を訪ひに行きし
 残月にえぞ鹿の尻白かりき
 近寄らず離れず鹿の横睨み

昭和62年札幌豊平の北光星先生を訪問したとき、父文鳥の話を懐かしがられ、前年上梓されていた句集『道遠』の扉に「新雪の六甲山を想ひけり 光星」と揮筆してもらった。私は札幌駅前のホテルまでプレーザーにマフラーだけの軽装で凍てついた深夜の道を歩いて帰ったが、少しも寒いとは思わなかった。この十一月諸用で室蘭・苫小牧・白老町・登別を訪問した折、ふと30年前のことを思い出した。往きは新日本海フェリーで20時間。夜新潟沖100キロを航行している不思議を思いながら北から佐渡の淡い島影を見て、出てもない天の川を眺めたりした。出雲崎に天の川を確かめに行つたときも曇天だった。もちろん芭蕉は天の川を見ていないし、「佐渡によこたふ」とよんだが方向が違う。「よこたふ」は文法的に誤法で「よこたはる」と自動詞を用いなければいけないがあえてこの詞を用いたのは詞のリズムを文法以上に必要としたのである。また曾良の日記と符号しないし、事実ではないが、「おくの細道」全体の構成を考えて、「遊女」の句を入れたりしている。柿本人麻呂の終焉について論争があつたが、すべて歌を頼りとしてるのは無理があるような気もする。本人が詠ったのか、事実を詠ったのかわらない。

歌聖・柿本人麻呂の終焉の地を齋藤茂吉



蝦夷神に一番近き紅葉かな
秋冷の佐渡の沖なる船にをり
オリオンは北の大地を傾けり
あり余る闇北海のオリオンは
オリオンへ直線の闇更けて来し
冬銀河仰ぎて道を迷ひけり
鹿鳴くや樽前山は闇に浮き
残月に鹿はカムイの聲で斬る
蝦夷鹿のカムイの域に立ち入らず
目と鼻の先にカムイと蝦夷鹿と
鹿鳴いてアイヌの注連のうちにあり

は強引に島根県三瓶山麓の湯抱(ゆがかい)温泉の地にある龜山だと決めつけた。

年まねくわれの恋ひにし鴨山を夢かと思ふあひ対いつる

我身みづから今の現にこの山に触りつつ居るは何の幸ぞも

鴨山は古りたる山か麓行く川の流のいにしへおもほゆ

「湯抱」は「湯が峽」ならむ諸びとのユガカイと呼ぶ発音きけば

人麿がつひのいのちををはりたる鴨山をしもこと定めむ

という具合である。梅原猛はそれに猛反発して『水底の歌』で論を張った。柿本人麻呂の歌は、

鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らねかにと妹が待ちつつあらむ

「岩根」まげるとは「死んで石棺の中に眠るといふ意味で、場所ではないとも。死んでいる者が妻の依り羅娘子(よさみのをとめ・よさみのいらつめ)に歌を残したというが、「柿本朝臣人麿、石見国に在りて臨死(みまから)らむとする時、自ら傷みて作る一首」という詞書がつけ

られている、いわゆる辞世の歌であるが」とし、芭蕉の「旅に病で」の句が人生の集約であるというような意味を決して持ちえないと梅原。

雪嶺抄

初紅葉

笹村 政子

国生みの島の一樹や小鳥来る
浦町の海光浴ぶる秋の午後
漁小屋にカーテンゆるる鱈日和
流れ藻のただよふ礁秋彼岸
秋草の匂ひに故郷近づき来
草ぐさにかくるる水の澄んでをり
山の端の日暮近づく水の秋
片仮名のわが慰問文夜の長し
長き夜の一皿加へ娘を待ちぬ
白髪が増えしとおもふ初紅葉

高華抄

露の玉

佐津のぼる

露の玉草の色して宿りけり
窓磨く生徒おしやべり休暇明
城垣は野面積なり穴まどひ
病室の窓明けて待つ月今宵
寝てしまひ見ずじまひなる望の月
裏窓にしまひ忘れの秋すだれ
秋の雨無声映画のやうにかな
着古しのシャツうしろまへ案山子立つ
喘ぎつつ峠越すバス牧水忌
死水を賜はるならば蓮の露

飛沫より鮎のこぼるる下り築 升田ヤス子

しづきよりあゆのこぼるるくだりやな ますだ やすこ

お供はいつも連名地藏盆
鱗雲撮るや主翼の端入れて
木洩日と吹かれてみたり秋の蝶
初嵐芋の葉擦れの音にぶく
衣擦れの音の寢屋より茶立虫
棗の実万葉仮名の碑を打てる
藤袴これぞ式部の薫りなる
飛沫より鮎のこぼるる下り築

築の水シブキの中から、急に鮎が跳び出てきた。その感動を淡々と写生して「こぼるる」と抑えたのがいい。

鮎が「躍り出た」などと劇的な出来事のように飾らず、落ち着いた写生が却って落鮎らしさも想像させる。

下り築とは秋、河口へむかつてくだる魚（主として鮎）を獲物とする仕掛けの築で、石や柵によって魚を一か所に導き水の勢いを利用して獲る。ヤス子の郷里、栃木県那珂川での作か。

髪薄くなりしは禁句葉鶏頭

谷口 一献

かみうすくなりしはきんくはげいとう たにぐち いっこん

人生はいつもこれから秋に入る
稲妻の丁度そのとき転けてをり
髪薄くなりしは禁句葉鶏頭
山寺に蔓たぐりする日和かな
推敲を大方終へし九月尽
秋うらら陽の限りなく大橋に

秋は「木の葉髪」といつて抜け毛の多い季節。わらわれの仲間もいつの間にかやが、気が付いたら頭髪が薄くなりかけているか、もしくは禿頭になっている。とくに髪の毛のことを不用意に口に出すのは特に禁句である。滑稽なことに季語の葉鶏頭は鶏頭の葉が美しく色づくことであるが、「はげいとう」と言葉に出すことを神戸では禁句で、「ハゲイトウ」というのは「禿げている」という意味になるからである。このフレーズは「裸の王様」の子どもが指摘して言ったのと同じようなもの。言葉遊びの句もときには息抜きの作品として楽しもう。おじいさんたちは「わかっとうわ」とお怒りになる。神戸だけの麩の句であるが……。

雪卿集 せつけいしゅう

藤生不二男

升田ヤス子

かなかなのこゑの滲みゆく暮色かな
夕映えの水に色あり稲の花
朝顔や午後の日差しゆるぎなし
秋草の高さに風のかよひけり
海峡のうねり高まる秋つばめ
蝉一つ流されぬたる秋の水
早稲の香の棚田を下る風のあり
御百度の踏まれし石や秋の風

鰯雲撮るや主翼の端入れて
木洩日と吹かれてゐたり秋の蝶
初嵐芋の葉擦れの音にぶく
衣擦れの音の寝屋より茶立虫
お供はいつも連名地藏盆
棗の実万葉仮名の碑を打てる
藤袴これぞ式部の薰りなる
夜食子に寮の炊事場込み合へる

永田万年青

志方章子

台風の記録変へつつ接近す
安堵して外出すれば残暑なり
肘まくら焦点あはず茶立虫
寝転びて夢の入口茶立虫
秋高し船を見送る鳶七羽
うろこ雲三々五々に吟行す
秋天に吸ひ込まれゆく鳶の笛
秋うらら波止に人の輪出来てゐし

蝉の声あらず淋しき目覚めかな
蝉時雨我も一所懸命なる
流星を見しと孫よりメール来ぬ
冬瓜の煮えしばかりを供へけり
お下がりの盆菓子ほろと口に溶け
父の居る空気重たき夏座敷
香水に孤独の匂ひ愛しけり
さき程の夏三日月のもうあらず

出口 誠

「赤は赤、白は白で」と彼岸花
ジヤングルの庭だからこそ虫の声
ポコポコと時折話す秋の川
止まっても翅を上げ下げ秋の蝶
彼岸花しべの先なる紅き色
めしべだけ残して白き桔梗花
めじべのみオレンジ色の白桔梗
パソコンが点けつぱなしの秋の昼



雪樹集

平居 澪子

住田千代子

新涼の陶の樂器のひびき合ふ

川床にゆづり合ひゐる座席かな

爽やかや孫に背丈をぬかれたる

川床の正座をつひに崩しけり

軌道跡かすかに残り曼珠沙華

ふくよかにとさか燃えゐて羽抜鶏

忌憚なく陵に吹く野分かな

大空に生まれて滝の落ちにけり

野分過ぎ古墳あやしきまで緑

木の橋を弾ませ滝を目指しけり

幾度も水澄む橋を渡りけり

定まらぬ歩幅に辿る滝の道

廣畑 育子

田尻 勝子

青田風字開拓は旧地名

炎天や六分遅れのバス着いて

魔界より下り来し烏瓜の花

生き死にの狭間に俳界茶立虫

大風にいたぶられぬる稲の花

四才の吾につき読みの恐ろしく

こほろぎの声遠雷のあはひかな

真夜にこそ電話をしてよ虫集く

月光に思はず躓きかけにけり

大男空渡りゆく夏は秋に

憎し痒し秋蚊に刺され指の先

炎昼や乳房垂れぬることの鬱し

谷口 一献

赤松有馬守破天龍正義

人生はいつもこれから秋に入る

木槿咲くここは根の国謎の国

稲妻の丁度そのとき転けてをり

綿壁や人麿呂と思ふ灯取虫

髪薄くなりしは禁句葉鶏頭

落鮎の飯を三膳大広間

山寺に蔓たぐりする日和かな

清流に生まれてもくず蟹となる

推敲を大方終へし九月尽

汚れ足ゆのつの湯にて御祓けり

秋うらら陽の限りなく大橋に

石碑睨め大和うた誦し晩夏かな

延川五十昭

火の国の川に巢を張る女郎蜘蛛

石見路や茄子の煮込みととろろ蕎麦

番台の乙女可愛や芋嵐

せせらぎに茂吉の歌碑や山牛蒡

女郎蜘蛛鉄気の強き男の湯

鴨山の歌碑を抱ける百日紅



六り花っ集か
六し花し集や
六う花う集う

十二月到着順



善野 行

炎天を来て幽霊の観世音
高野槇のみ供へけり墓参り
うかうかと青紫蘇採りに夕間暮
夕べ来し池の松影秋めきぬ
初風のまだ身に馴れぬ朝かな

小林はじめ

天の河作用の星空ひとり占め
天頂は私の道よと織女星
天漢は空に穿ちし穴のごと
青ヴェール着こなし澄すすばるかな
いるか座はフラムスチードアイドルに

延川 笙子

高潮の第二国道雨月かな
吾が影のひたひたと添ふ月夜かな
十三夜文福茶釜の軸を掛け
赤星を際立たせぬる二日月
星月夜横切る猫の影淡し

大内 幸子

農記録書き込む頁大根蒔く
夜濯ぎの乾かぬ朝となりにけり
子等残す鉛筆削り夏は逝く
一人来て一人の漢稻を刈る
筆洗ふいつしか秋の水となり

蛩雪譚

山田六甲

歳末風景アメ横



笹村政子

国生みの鳥の一樹や小鳥来る

一本の樹木に小鳥が渡つてきた。おそらく神話「国生みの」話の二神も運上から降臨してこの島で契りを結んだのであろう。一度目はイザナミ（女性）から愛し合ひましょう、と声をかけて結ばれ、生まれた子が希望通りでなかつたので、今度はイザナギのほうから、声をかけて結び直したのであるという。

小鳥たちも一冬を過ごして春には雌雄が結ばれ小鳥の子孫も増える。何もかもがこの淡路の島に始まっているのだなあと古代ロマンに思いを馳せて小鳥を見上げているのである。

佐津のぼる

露の玉草の色して宿りけり

露は秋の季語。句のように草木に着いた露が草の色を反映して染まったように見える様子の写生句。自然の移ろいを庭の縁先に座して感じるのも俳句の楽しみである。朝、露が地上に降りて旭に輝き、やがて消える。その露の姿が儂さに通じ、露けし、などの表現も俳句では重用され、人や動物の命を譬えて観じるのである。命は遠くからきてたちまち遠くへ去る、といわれるが、実は薄皮一枚の隣から生まれてきて、隣へ還るだけなのである。決して遠い所ではなく、すぐ隣なのである。宇宙もしかり、人間から見れば果てしないように思えるが、宇宙の立場から見れば、この句のように草木に宿る露の玉ほどの宇宙なのである。